

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

岡崎電灯を創設し岩津発電所建設に

家財を傾けた 杉浦銀蔵

岡崎電灯の創業者の1人、杉浦銀蔵(幼名仙之助)は、弘化4(1847)年に幡豆郡西尾順海町(現西尾市)に生まれた。11歳で地元の古着商河内屋の店員となり、13歳で主人の代理で大阪へ買付けに出るほど信用を得ていた。慶応3(1867)年、岡崎で呉服商沢津屋を営む杉浦家の養子となり、傾きかけた家業立て直しに尽し明治4年父の逝去後、銀蔵を襲名した。杉浦は寡黙ではあったが、時代の先を読み率先して新事業に挑戦し、「熟慮断行」の人と言われた。洋反物の取扱い、桑苗の栽培(明治17年)、織布工場の経営(同18年)、洋風瓦の製造(同19年)等に取り組んだほか、東海道線の建設が始まると、「鉄道の近きは地方の衰微になる」との意見が大勢の中で、岡崎中心部への停車場誘致の請願運動を行った。



杉浦銀蔵

## 岡崎電灯合資会社創業と資金調達難

明治28年頃、電灯事業創設の話が持ちあがり、友人田中功平(丸藤旅館)、近藤重三郎(醸造業伊勢屋)と相談し事業化を決意した。水力技師大岡正の協力を得て、水力発電による事業計画を立て、明治29年に岡崎電灯合資会社(資本:3万円)を設立した。田中が測量工事監督を、近藤が用地買収や地元対策を担当したのに対し、杉浦は資金と物資の調達を担当した。

一番の問題は資金調達であった。電灯事業は世間から不信の目で見られていた時代で、人々は敬遠主義をとり、物資は現金支払いしか認められず、金融機関も融資に応じなかった。工事には梱包用の釘を伸ばして再使用するなど、専ら倹約主義で進められた。資金繰



田中功平



近藤重三郎

りに窮したとき、杉浦は自家の蔵を開け、米・味噌があるのでこれで暫く猶予頂きたいと工事請負人に頭を下げたこともあった。資金負担に耐えられなくなった近藤・田中は明治30年から6年半事業を離れ、その間委託を受けて杉浦が事業経営を続けた。この資金難を、八丁味噌で有名な早川休右衛門の支援を得て乗り越えた。

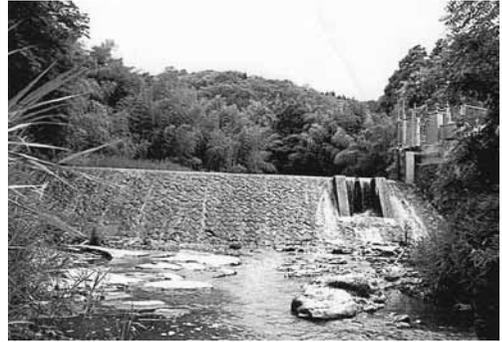
## 岩津発電所の建設

発電所は岡崎郊外、郡界川の小瀑布（二畳の滝）付近、額田郡奥田村大字日影（現岩津町）に設けられた。担当技師大岡正が同地点を見て「天の福音」と語るような水力の適地であった。岩津発電所は出力50kW、米国ペルトン社製水車、三吉工場製発電機を使用し、明治30年7月に完成した。火力発電が主流の当時において、水力発電は先駆的な事業であった。特に、岡崎までの16\*マイルを高圧2400Vでの遠距離送電を成功させたことで、水力発電の

可能性を大きく広げた。このため、同発電所が完成すると、東京、三重、鳥取など全国から見学者が訪れた。



岩津発電所（現）



岩津発電所堰堤



岩津発電所二畳の滝

## 杉浦銀蔵の逝去と後継者

岡崎公園の傍らに建つ「杉浦銀蔵頌徳碑」が「電灯ノエヲ起シ、事ハ草創ニ属シ、社勢迺<sub>レ</sub>遑<sub>レ</sub>（ちゅうてん：とどこおる）ス、君自ラ振興ニ任シ、日夜尽瘁、将ニ其功ヲ奏セントシテ病ヲ得テ起タズ」と記すように、杉浦銀蔵は開業2年後の明治32年10月、52歳で没した。創業の苦勞のみを経験し、成功の喜びもつかの間、この世を去ったのであった。



杉浦銀蔵頌徳碑

事業を継いだのは、第3代杉浦銀蔵（前名 松四郎）で、矢作川筋に東大見、賀茂、足助、百月発電所などを次々に建設し、また供給区域を岡崎町から西三河一帯へと拡大した。昭和5年には東邦電力豊橋区域と合併して中部電力（岡崎）が設立されるが、同社の社長はその次男杉浦英一が就任し、杉浦家は3代に亘り西三河の電気事業発展に尽くした。（浅野 伸一）